

クアラ Lumpur プール
での子育て記

久保田 聡

マレーシアで長期滞在する人々が増えていくようだ。ロングステイ財団のアンケート調査によるとロングステイ希望国としてマレーシアが八年連続で一位になっているらしい。定年退職を迎えた世代だけでなく、最近では働き盛りの世代が子供の英語教育のため家族同伴で移住するケースも増えていくらしい。マレーシアでの子供教育はどのようなものだろうか。

我が家では首都クアラルンプールで暮らした三年半のあいだ、ちょうど子供の幼児教育の時期に当たっていた。そこで、まず幼稚園を選ぶことになった。選択肢は、日本人幼稚園、インターナショナル・スクール、現地の幼稚園の三つがある。考えた末に、せっかくマレーシアで生活するのだからと現地の幼稚園に通わせることにした。マレーシアの幼稚園はスクールバスでの送迎が一般的である。お

そらく防犯目的と公共交通機関が発達していないこと、それと暑さのためだろう。毎朝、インド系の女性が運転する幼稚園バス（実は自家用ミニバン）が迎えに来てくれることになった。バスのなかには、マレーシア人のほか、日本人、韓国人、西洋人など色んな人種の子供たちがいた。

先生たちの顔ぶれは、マレー系、中華系、インド系と多様で、普段の会話も教育も英語が使われている。ちなみに買い物やタクシーなども一般的に英語が通じる。幼稚園では、英語が話せない新入園児が入ると、年上の子供が自発的に面倒をみているようだった。当時三歳のわが子の場合、二つ年上の日本人の女の子が先生の言葉を通訳しながらお世話をしてくれた。おかげで日本語しか話せなかったにもかかわらず、すぐに馴染むことができ、一年後には新入生の面倒

をみるくらいに英語を身につけたようだ。英語での生活に自然に溶け込む姿はとても羨ましく思えた。

幼稚園は小高い丘の上の閑静な住宅地にあり、やや大きめの庭付き戸建ての家を改装したような建物だった。知らなければ住宅と思ってしまうほどだ。日本人幼稚園やインターナショナル・スクールの立派な建物に比べると、何とも家庭的な雰囲気である。芝生の庭には多少の遊具もある。子供たちは日々その庭で歓声を上げながら遊んでいたが、近所からの苦情は特になかったように、マレーシア人社会の寛容さには感謝である。給食の後はシャワーを浴びてから帰宅する。至れり尽くせりだ。

教育内容は、図画、工作、音楽、ダンスのほか、算数ドリルや英語がある。日本の幼稚園に比べると、先生の才能に依存する部分がやや多いような気がしたが、特にアート系は得意とする先生がいて子供の独創性を上手く引き出していたようだ。英語の教科書には日本の高校レベルを超える単語も出てくるので幼児教育といってもあなどれない。また出身国の習慣や文化をプレゼンテーションする機会が

順番に回ってきて、例えば「日本の冬」というお題が与えられ写真や絵を使って説明するなど、相互理解やコミュニケーション力を養うことも大切にされていた。

幼稚園生活の最後を締めくくる卒園式は、六十年代のアメリカン・ポップスに合わせたダンスで始まった。雨上がりの陽光のなか、園庭のテントの下に参列した私たちはカジュアルな服装でリラックスタイプでいる。卒園証書の授与式では、子供たちは英国式にガウンに学帽とフォーマルなスタイルである。音楽にあわせ、ステージに一人ずつ上がり、先生に抱擁（ハグ）されて証書を受け取った。感激のあまり涙する先生も多く、子供たちが愛情を注がれてきたことを実感した。最後に父母のスピーチとなり、筆者の名前が呼ばれステージに上がると、父母代表であることがわかった。親のプレゼン能力も試されるのであった。

日本とマレーシアの教育、どちらが良いともいえない。ただ、マレーシアの大らかな雰囲気と英語の生活環境は確かに魅力的であった。

（くぼた さとし／アジア経済研究所 成果普及課長）